

巻頭言ーシンポジウムの趣旨と内容について

アジア社会文化研究会は、1999年に広島大学大学院社会科学部研究科と国際協力研究科の教員・院生を中心に活動を開始し、2006年以降は大学院総合科学研究科を母体に活発な活動に従事している研究組織である。その目的は、各研究者が専門分野を超えた学際的な討論を行い、各々の研究の幅を広げることであり、研究会の開催に加え、それに連動した学術雑誌『アジア社会文化研究』の継続的な発刊が活動の中心である。

2008年、本研究会は本研究科リサーチマネージャー（RM）養成プログラム学生プロジェクトの助成を受け、シンポジウム「地域研究を問い直すー地域研究の総合性という視点からー」を開催した（『アジア社会文化研究』第10号参照）。今回の「資料から問い直す地域研究のあり方」は、それを継いだ企画である。地域研究をめぐる様々なディシプリンとの対話、その知識の個々の研究への活用を目指すと共に、院生間の連携の緊密化、学外研究者とのネットワーク形成も主たる狙いとした。実行委員会は、本学院生では大久保豊（代表）、加茂川侑享、河内銀太、阪野佳子、諏訪春菜、高田唯、西井美穂、楊小平、PDでは越智郁乃、新本万里子、教員では長坂格氏、三木直大氏、水羽信男氏、吉村慎太郎氏より構成された。この場を借りて、RM養成プログラム学生プロジェクト助成を認めて頂いた本研究科に御礼申上げる。

ここで午前のセッション1（テーマ「資料といかに向き合い、何を読み解くか」）についてのみ紹介すると、そこでは、ウクライナのオレクサンドル・コヴァレンコ氏と台湾の王薇婷氏の発表が行われた。両氏の発表は、学問的関心を惹くそのテーマ性だけでなく、日本語を母語としない研究者が日本語の資料といかに対峙しているかという点でも、興味深いものであった。司会は教育学研究科の川口隆行氏に、コメンテーターは本研究科の崔真碩氏にお願いした。尚、セッション2（テーマ「人とモノのエージェンシー」）及びセッション3（総合討論「私たちにとって資料とは何か」）の発表の詳細は、それぞれのシンポジウム特集論説を参照されたい。

2011年度アジア社会文化研究会会長 高井 龍